

そのあくる日もごんは、栗をもって、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄《なわ》をなっていました。それでごんは家の裏口から、こっそり中へはいりました。そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。「ようし。」兵十は立ちあがって、納屋《なや》にかけてある火縄銃《ひなわじゅう》をとって、火薬をつめました。そして足音をしのばせてちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばたりとたおれました。兵十はかけよって来ました。家の中を見ると、土間《どま》に栗が、かためておいてあるのが目につきました。「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落しました。「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは」ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出ていました。（新美南吉「ごん狐」）